

## オラ・イエイロ(1978-) 合唱曲

オラ・イエイロ (Ola Gjeilo) は、ノルウェー生まれ。ノルウェー国立音楽院で音楽を学ぶ。その後、イギリス王立音楽院を経て、2001年にアメリカへ移住、ニューヨーク・ジュリアード音楽院で学び、2006年に作曲の修士号を取得した。

民謡、クラシックからジャズや映画音楽まで幅広い分野を手がけている。特に無伴奏の宗教作品では、その透明感が多くの人を魅了しており、それらは彼がコンポーザー・イン・レジデンスをつとめたヴォーカル・アンサンブル2団体「Voces8」「Phoenix Chorale」の録音で聴くことができる。(前者は DECCA、後者は Chandos レーベル。)

以下の解説は、Walton Music 社出版の楽譜に書かれた作曲者自身の文章から抜粋・要約した。曲目の丸付き数字は演奏順、括弧内は作曲年である。

### ①. Ubi caritas (2001年)      ③. Tota Pulchra es (2001年)

イエイロがこの2つのテキストに出会ったのは、まだ高校生の頃、デュリュフレ作曲「4つのグレゴリアン・モテット」のレコードを買った時だという。彼のごく初期の作品であるが、聖歌の様式を反映しつつも、既存の聖歌に基づいたものではなく、全くのオリジナル作品である。

### ②. Northern Lights (Pulchra es amica mea) (2007年)

この曲の歌詞は「恐るべき力強い美」についてのものだが、音楽の表面は全く静謐である。彼は2007年のクリスマスの時期に、オスロ郊外の屋根裏部屋でこの曲を書いた。部屋の窓外には、星空の下、冬らしい冷ややかな湖が広がっていた。彼はそれを見ながら、この歌詞の「恐るべき美しさ」には、「北の光＝オーロラ」に通ずるものがあると考えた。オーロラの光は、昔の人にとっては魅惑的であると同時に恐ろしさも感じたであろう、と。

### ④. Serenity (O Magnum Mysterium) (2010年)

彼は、「宇宙的で記憶を呼び起こすような感覚を与えつつ親近感もある」「暖かいみずみずしいサウンド」が好きだという。しかしこの曲では、「フィルターなどを通さずに心からストレートに来るもの」を表現している。「交響的で、かつ感情のこもった」アカペラ作品を書きたかった、と彼は書いている。

本日演奏する4曲のうち、この曲だけ独奏チェロとの共演となる。

## ハインリヒ・シュッツ(1585-1672) 「ヨハネ伝による受難曲」

昨年の第37回演奏会では、シュッツの宗教音楽の代表作とも言うべき「ムジカリッシェ・エクゼクヴィエン (音楽による葬送)」を演奏した。

今回は、彼の最晩年、1666年頃の作品「ヨハネ受難曲」をとりあげる。

ほぼ同じ頃にシュッツは「マタイ受難曲」も作曲している。どちらも「聖なる福音史家によって書かれた我々が主イエス・キリストの受難」というタイトル曲に始まり、その後はひたすら聖書(ルター訳のドイツ語聖書)の受難物語部分に曲をつけられ、終結合唱で終える。無伴奏、かつバッハのように場面の合間毎にコラールやアリアを入れたりしないシンプルな作りである。テノールの福音史家、バスのイエスなど登場人物、合唱はイエスを罵倒する群衆の役である。

この「ヨハネ受難曲」は、バッハの同曲と同じく、イエス逮捕の場面から始まるが、最後はイエスが息絶えたところで終わり、埋葬は入らない。終曲合唱はバッハの「ヨハネ」第37曲でも歌われるコラールの歌詞である。

今回、我々が使用する楽譜は、アルノルト・メンデルスゾーン(Arnold Mendelssohn, 1855-1933, 有名な作曲家の従兄弟の子)による校訂版である。この校訂は昨今のオリジナル指向の校訂とは異なり、ドイツ・ロマン派の伝統を加味したものである。

彼は、冒頭合唱の前と終結合唱の後、および場面の合間の5カ所、合計7曲のコラールを挿入することを提唱している。また全曲にオルガン伴奏を付加している。

我々は、コラール挿入の提案を受け入れて演奏する。そのコラールは全てバッハの曲にのせて歌う。

以下、大まかなストーリー展開とコラール挿入箇所を紹介する。(詳細は歌詞対訳参照)

- ①. コラール「Jesu, deine Passion」  
続いてシュッツによるタイトル曲
- ②. イエス逮捕  
剣を振るったペテロに対して、イエスは「剣を収めよ。父が与えた杯を飲まずにいられようか」と言う。  
コラール「Jesu, meines Lebens Leben」
- ③. 祭司長ハンナ邸での裁判  
打たれたイエスは「私のどこが悪いのか証明せよ。なぜ私を打つのか」と言う。  
コラール「Wer hat dich so geschlagen」「Ich, ich und meine Sünden」
- ④. 大祭司カイファ邸でのペテロの否認、続いて総督ピラトによる裁判  
イエスはピラトに「私の国はこの世のものではない」と答える。  
コラール「König, dem kein König gleicht」
- ⑤. 引き続きピラトの裁判  
ユダヤ人たちは「バラバを釈放しろ」と叫び、イエスに嘲笑と平手打ちを喰らわせる。  
コラール「O Haupt voll Blut und Wunden」
- ⑥. ピラトはまだイエスの無実を主張するが、ユダヤ人たちは「十字架につけよ」と叫ぶ。  
ついにイエスは引き渡され、ゴルゴタで十字架につけられる。  
コラール「O Welt, sieh hier dein Leben」
- ⑦. 十字架につけられたイエスの周囲の出来事  
兵士たちは彼の衣服をくじ引きで分け合う。  
イエスは愛する弟子に母を託す。そして「成就した」と言って息絶える。
- ⑧. シュッツによる終曲(バッハ「ヨハネ受難曲」でも歌われるコラールの歌詞)  
続いてコラール「Ich danke dir von Herzen」

## シャルル・グノー(1818-93) 「聖セシリアの荘厳ミサ曲」

2015年の第36回演奏会において、我々は彼のミサ曲第4番「コラール・ミサ」を演奏した。今回は、彼の宗教曲の代表作「聖セシリアの荘厳ミサ曲」をとりあげる。

グノーは1839年に名誉あるローマ大賞※を獲得し、2年間ローマに留学した。この間、彼はパレストリーナの教会音楽を研究した。さらにローマからの帰途、ライブツィヒでメンデルスゾーンからバッハの作品を学んだ。こうしてパリに帰った後は、サントウスタッシュ教会の聖歌隊長兼教会オルガニストに就任。一時は聖職者の道を進むか迷うほどで、しばらく宗教音楽に専念した。この時期に書いた荘厳ミサをもとに、1855年に完成させたのが「聖セシリアの荘厳ミサ曲」である。

その後、彼は歌劇「ファウスト」に代表される劇場音楽の分野に進出していくが、一方で最晩年に「レクイエム」を作曲するなど終生宗教音楽から離れなかった。ミサ曲は約20曲残している。

聖セシリア(セシル、チェチーリア)は音楽の守護聖人とされる。その記念日は11月22日で、当曲は1855年のその日にサントウスタッシュ教会で初演された。

本来はオーケストラ伴奏で演奏されるが、本日はオルガン&ピアノ伴奏での演奏となる。

以下、曲の構成を簡単に紹介する。

- ①. **Kyrie**  
伴奏の旋律で合唱が静かに歌い出し、ソリストとの掛け合いを展開する。
- ②. **Gloria**……4部からなる。  
第1部：合唱ハミング、ソプラノ・ソロが「天には神の栄光、地には平和を」と歌う。  
第2部：合唱が力強く「我らは神を称える」から「全能の父なる神よ」まで。  
第3部：バス・ソロが「主、イエス・キリストよ」と歌い出し、ソリストによる三重唱。  
その最後に合唱が「我らを哀れみ給え」を歌う。  
第4部：合唱が第2部の旋律で「あなただけが聖なり」と歌い、「聖霊とともに」まで力強く歌いきる。
- ③. **Credo**……3部からなる。  
第1部：合唱が力強くユニゾンで「我、唯一の神を信ず」と歌う。  
第2部：「肉体を受けられ」から「十字架につけられ」まで、ソロと合唱の掛け合い。  
第3部：「そして復活された」で急激にクレッシェンドし、以下は第1部の力強いユニゾン旋律の繰り返し。コーダでは「死者の復活を信ず」からアルペジオの上で「来世の生命を信ず」が歌われる。
- ④. **Offertorium**  
管弦楽のみの曲で、全曲の中で間奏曲的な役割を果たしている。
- ⑤. **Sanctus**  
テノール・ソロが先導。最後は合唱がソロと同じ旋律で盛り上がり、Hosannaで締める。
- ⑥. **Benedictus**  
ソプラノ・ソロが先導し、合唱が ppp でそれを繰り返す。最後の Hosanna は fff。
- ⑦. **Agnus Dei**  
8分の12拍子の軽快な合唱。途中、テノールとソプラノのソロが、通常文に無い歌詞を歌う。(歌詞対訳参照)

※ローマ大賞……芸術専攻の学生にフランス国家が授与した奨学金付留学制度。

1663年にルイ14世によって創設され、1968年まで存続した。